

昭和七年

道路の改良

六月一日

第四十卷
第六號



言 頭 卷

招集された臨時議會に於て、年來の抱負を實現せむとしてみた犬養總理大臣は、思量淺薄な兎漢の手に倒れた、吾人は立憲治下に於て此種誤れる思想に基く直接行動を其の根底より艾除するを期すると共に、兎手に倒れた首相並に遺族に對し滿腔の同情を捧げて已まない。

此不祥事の爲に内閣は交迭し齋藤内閣の成立を見るに至つた。而して其の機構は政民兩黨に基礎の一部を置き、政黨外の勢力を加へて所謂國民的内閣と言はれてゐる。成る程既成政黨の何れもが黨利黨略に没頭し國政を荼毒した從來の行續に鑑るときは、内外重大の秋或は此組閣方法も已むを得ないかも知れない。併し新内閣が生まるゝに至つた原因即ち犬養首相の死、夫れが議會政治を否認し獨裁政治を主張するフアツシヨの思想に基因するものとすれば、寧ろ憲政の常道に則つて純然たる政黨内閣を組織せしむることが、夫等誤れる思想を根絶せしむる効果を收めたのであるからうか、吾人の頗る疑ふ所である。世の識者が兎暴に驚愕して恐怖の餘協力内閣の出現を望み、自ら信用せざる既成政黨に基礎を置きたる内閣を目して議會政治を否認せざる證左なりと言ひ、黨外一部權勢者の入閣を以て國民的内閣なりと言ふが如きは、何れも矛盾した言辭と評せざるを得ない。吾人は政黨淨化の爲に、相容れざる政策を持つる政民兩黨が、組閣に参加した其の墮落を責むると共に、眞に國民利福の大任を執行するに足るべき新政黨が創設されむことを希望して已まない、夫れが刻下重大時に處する最善の方途と言はねばならぬ。